Kyoto University
Cross-Sectoral Research Platform Development Program
Report FY2020-2022

NO.3

京都大学

分野横断プラットフォーム構築事業
成果報告書
2020-2022年度

京都大学　学術研究展開センター

京都大学　学際融合教育研究推進センター

‖ ISHIKAWA Fuyuki ‖

京都大学では、その基本理念である「自由の学風」に涵養されて、数々の世界に類を見ない独創的な学問領域が数多く生み出されてきました。

近年、研究を取り巻く環境が大きく変化し、文理融合を含む学際領域の研究の必要性が強く求められています。京都大学では学術研究展開センターと学際融合教育研究推進センターが協調して、新しい研究領域を創生していく京都大学の伝統ある独創的研究創生力を背景に、自由な発想に基づき異なる領域の研究者が議論し、新しい学際研究領域を生み出す場を作ることを目指して、平成25年度より「百家争鳴プロジェクト」を立ち上げました。

本冊子でご紹介する「分野横断プラットフォーム構築事業」は「百家争鳴プロジェクト」のコアとなる事業で、本学に多くの優れた学際共同研究が芽吹くための土壌（プラットフォーム）の構築を目的としています。当事業が発展し、これらの活動と成果が学外にも広がり、新しい学術研究の創出が大きく進んでいくことを期待しています。

京都大学
学術研究展開センター長
石川冬木

‖ TOKITOU Norihiro ‖

京都大学学際融合教育研究推進センターは、本学において学問領域を横断する学際的な教育・研究を推進するための活動を支援することを目的として、2010年3月に設置されました。分野横断型の学際的研究に関するプロジェクトを実施する多数のユニットがこのセンターのもとで活動しています。

近年、「総合知」の推進をはかるべく、分野を問わない萌芽的分野や分野を超えた連携の必要性はますます高まっています。ボトムアップ型の研究を支援する当「分野横断プラットフォーム構築事業」は、本学における分野越境を促す場面創出に大きく寄与するものであり、今後も、学際という挑戦マインドを有する研究者を本学に増やすべく、その風土づくりによりいっそう貢献していきます。

京都大学
学際融合教育研究推進センター長
時任宣博

目次・支援対象一覧（2020～2022 年度採択分 代表者所属・職位は企画実施当時のもの）

分野横断プラットフォーム構築事業 概要 6

▶2020 年度

建築学と異領域とのダイアローグ 小見山陽介（工学研究科 講師） 7
建築学と異領域とのダイアローグ シンポジウム＃1【生命論的建築】
建築学と異領域とのダイアローグ シンポジウム＃2【建築形態の数理】

京都大学 学際融合教育研究推進センター 芸術と科学リエゾンライトユニット 富田直秀（工学研究科 教授） 8
格子欠陥の現在そして広がる未来ー格子欠陥とアート

リプロダクティブ・ヘルス＆ライツ ライトユニット 中山健夫（医学研究科 教授） 9
とことん問おう！日本のリプロダクティブ・ヘルス＆ライツ ①SRHR と人口政策
とことん問おう！日本のリプロダクティブ・ヘルス＆ライツ ②SRHR と不妊治療
とことん問おう！日本のリプロダクティブ・ヘルス＆ライツ ③包括的性教育

ホテル利用学研究会 高山佳奈子（法学研究科 教授） 11
京都を元気にする「ホテル利用学」 ―暮らしと社会を考える多分野アプローチ―＜第 1 回＞「ホテル会員権とは何か」
京都を元気にする「ホテル利用学」 ―暮らしと社会を考える多分野アプローチ―＜第 2 回＞「学術としてのホテル利用学に向けて」

IPECON(International Political Economy Conference)&I-1 グランプリ 2021(国際政治経済学カンファレンス&I-1 グランプリ(国際関係論最優秀学生グランプリ)2021 年) 坂出健（公共政策大学院 准教授） 12
IPECON(International Political Economy Conference)&I-1 グランプリ 2021

▶ 2021 年度

京都大学微細気泡研究会 上田義勝（生存圏研究所 助教） 13
うたかたの如く、消えそうで実は消えない微細気泡を、様々な視点で研究しませんか？

超分野大喜利プロジェクト 桑島修一郎（総合生存学館 特定教授） 15
サイバーデモクラシー ―サイバースペースと民主主義の関係―
第 2 回 超分野大喜利 人類滅亡 滅びゆく宇宙の中で私たちはどう生きるか
第 3 回 超分野大喜利 死のフィクションを解体する
第 4 回 超分野大喜利 ダイバーシティのゆくえ -Whither Diversity?-
第 5 回 超分野大喜利 2050 年脱炭素に向けて、暮らしを劇的に変えられるか？
第 6 回 超分野大喜利 暴走する行政
第 7 回 超分野大喜利 価値のパラダイムシフトー「複素価値」の世界ー

複合国家イギリスを議論する思想史研究者の会 竹澤祐丈（経済学研究科 准教授） 17
「かみ合わない」議論への思想史学からの挑戦 イギリス複合国家論に関する歴史学との対話の試み

Team Heritage 速水洋子（東南アジア地域研究研究所 教授） 18
Challenges and opportunities in the fields of heritage preservation and creative tourism development in the popular living heritage sites in Asia.

「演劇×○○」超学際パラシュート部隊 蓮行（経営管理研究部 特定准教授） 20
第 1 回「演劇×教育」パラシュート研究会 ―ジャンル混合で「演劇×道徳」の授業を体験する―
第 2 回「演劇×教育」パラシュート研究会 ―ジャンル混合で演劇ワークショップを体験する―
第 3 回「演劇×教育」パラシュート研究会 ―ジャンル混合で演劇ワークショップを体験する―

臨床経営研究会 伊藤智明（経営管理研究部 特定助教） 22
第 1 回臨床経営学フォーラム －経営学者による起業と経営：周縁にいることの大切さと難しさ－
第 2 回臨床経営学フォーラム －経営者と経営学者のパートナーシップ－

▶ 2022 年度

陶磁器の化学 佐々木善浩（工学研究科 准教授） 24
陶磁器の化学 第 1 回ワークショップ「無機・有機・高分子化学の視点から陶磁器の光彩発現に迫る」

Everydayness Research Group Fernando Wirtz（文学研究科 助教） 25
Inverted Mythologies: The Role of Political myths and populism from a bottom-up cross-disciplinary.

「美を必要とする歴史プロジェクト」京大・東大文理融合研究グループ
上田竜平（人と社会の未来研究院　助教）　27
人物顔貌の芸術表現とその認知：人文学・認知科学・制作からのアプローチ

Mindful Living Research Group　Deroche Marc-Henri（総合生存学館　准教授）　28
「高等教育におけるマインドフルネス即ち正念正知——東洋と西洋の観点」
“Mindfulness in Higher Education: East-West Perspectives”

The Philosophy and Psychology Academic Exchange　Michael Walter Campbell（文学研究科　助教）
Ethan Sahker（医学研究科　助教）　30
Cognitive Behavioural Therapy and Gestalt Psychology: Theoretical and Clinical Perspectives.

Urushi team　Pincella Francesca（化学研究所　講師）　32
Past, present and future of Asian lacquer: urushi from art to electronics.

2021 年実施アンケート結果　34

分野横断プラットフォーム構築事業 概要

目　的
多くの学際研究が芽吹き育つためのプラットフォームを構築する

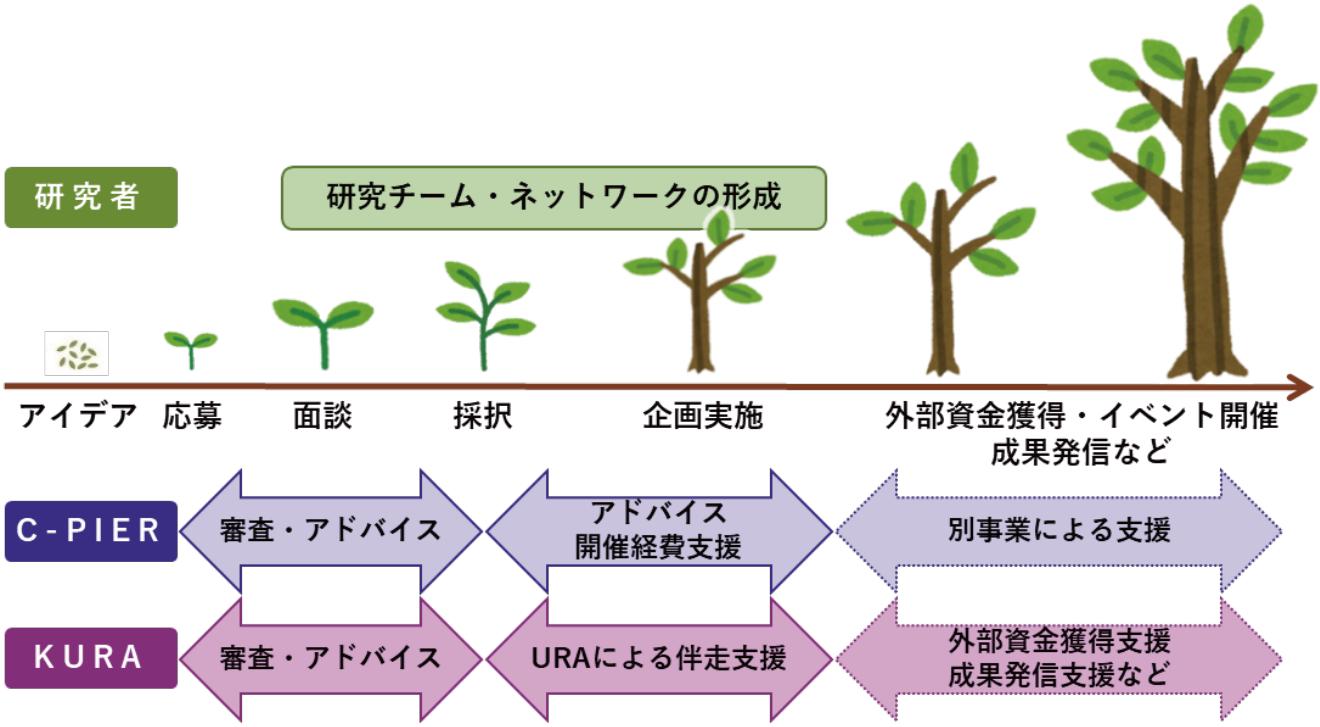
対　象
学際共同研究のアイデアを持ち、その実現に向けて動きだそうとしている研究者

手　段
ワークショップやセミナー等の開催経費を支援するとともに、運営やファシリテーションに関するアドバイスや人の紹介をおこなう

期待される効果
・多角的で広い視野、異分野の研究者や研究者以外との意思疎通能力、意見をまとめる能力、運営や事務の能力など、学際共同研究プロジェクトをマネジメントする研究者の能力が育つ ・学際共同研究チームや研究ネットワークが形成される ・研究者、市民、自治体、省庁、NPO、企業等が繋がる場が形成される

【体制】

学際融合教育研究推進センター（C-PIER）と学術研究展開センター（KURA）が連携して運営



建築学と異領域とのダイアローグ

先端的な研究領域と建築学はどんな接点を持つことができるのか？

https://research.kyoto-u.ac.jp/gp/g058/
［関連情報］https://twitter.com/komiyamaken

京都大学の先端的研究分野の研究者と工学研究科建築学専攻の研究者とのダイアローグ（対談形式のシンポジウム開催）により、先端技術（エマージェント・テクノロジー）への建築学的視点からの理解と、建築学的思考による異領域への寄与を探求する。

［メンバー］

小見山陽介　京都大学工学研究科建築学専攻　講師（建築設計学講座　生活空間設計学分野）
京都大学小見山研究室（岩見歩昂［B4］、谷重飛洋子［M2］、松原元実［M2］、宮原陸［M2］、石井一貴［M3］）

▶企画内容（ワークショップ、セミナーなど）

建築学と異領域との対話を通して、お互いが刺激を与え合えるような関係を築きたいと考えています。
半年間にわたる公開シンポジウムやその準備会議をとおして、研究室内外により広いネットワークをつくっていくことで、京都大学という「知の拠点」において、学際的活動のよりどころとなるプラットフォームをつくることに大きな学術的意義があると考えます。
本企画をきっかけとして、より継続的な建築学（工学）と異領域との交流機会創出へと展開することを期待しています。

建築学と異領域とのダイアローグ シンポジウム ＃1【生命論的建築】

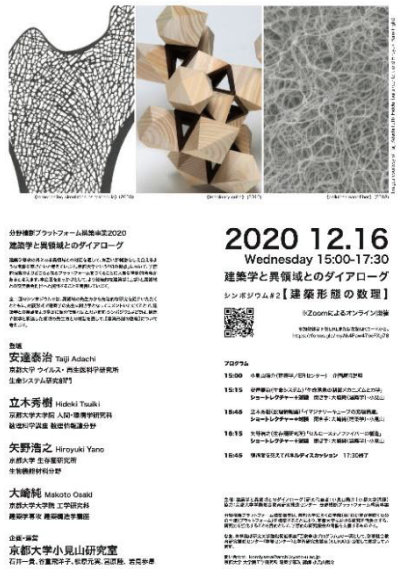
2020 年 11 月 11 日（水）
Zoom によるオンライン開催

15:00　小見山陽介（建築学／ER センター）　企画趣旨説明
15:15　松浦健二（昆虫生態学）「社会性昆虫の行動における自己組織化」
　　聞き手：平田晃久（建築学）・小見山
15:45　伊藤真陽（iCeMS）「孔の自己組織化が生むポリマーの構造色」
　　聞き手：平田晃久・小見山
16:15　聴講者を交えてパネルディスカッション
17:00　終了

建築学と異領域とのダイアローグ シンポジウム ＃2【建築形態の数理】

2020 年 12 月 16 日（水）
Zoom によるオンライン開催

15:00　小見山陽介（建築学／ER センター）　企画趣旨説明
15:15　安達泰治（バイオメカニクス）「骨構造の機能的適応の力学」
　　聞き手：大崎純（建築学）・小見山
15:45　立木秀樹（数理情報論）「イマジナリーキューブの充填構造」
　　聞き手：大崎純・小見山
16:15　矢野浩之（生物機能材料）「木材とセルロースナノファイバー」
　　聞き手：大崎純・小見山
16:45　聴講者を交えてパネルディスカッション
17:30　終了



京都大学 学際融合教育研究推進センター
芸術と科学リエゾンライトユニット

物理学者とアーティストが連携して行う研究会です。

https://research.kyoto-u.ac.jp/gp/g059/
[関連情報] https://sites.google.com/view/kyotoscienceart/

物性物理は理論と技術の進展に伴い発展してきたが、近年、新たな視点からのアプローチが求められている。これまでの流れにとらわれない新しい視点を持つアーティストと物理学者が協同して、アート作品を作り、物性物理の概念を拡張することを目指す。

［メンバー］

富田直秀　京都大学工学研究科　教授（医療工学）
湊丈俊　自然科学研究機構分子科学研究所　主任研究員（物理化学）
秋葉宙　東京大学物性科学研究所　助教（物性物理）
松本祐典　九州大学大学院芸術工学研究院研究院長戦略室　学術研究員
ピノー株式会社　代表取締役（アート）

▶企画内容（ワークショップ、セミナーなど）

格子欠陥の現在そして広がる未来―格子欠陥とアート

2020 年 12 月 13 日
Zoom によるオンライン開催

格子欠陥物理とアートを融合し、格子欠陥概念の拡張とアーティストの表現の可能性を広げる研究会である。
今回の研究会で、各参加者が得られたものは、継続的に発展していくと期待される。

プログラム
13:00-13:10　開会挨拶
13:10-13:40　【招待講演】結晶は生きている：結晶が形作る美しい成長パターン（佐崎元・北大低温研）
13:40-14:10　【招待講演】格子欠陥からイメージしたキャラクターデザイン（谷口亮・イラストレーター）
14:10-14:40　【招待講演】人工知能による格子欠陥の内挿的学習（溝口照康・東大生産研）
14:40-15:10　【招待講演】（仮）刹那的抽象表現における格子欠陥（石井則仁・山海塾）
15:10-15:20　休憩
15:20-15:50　【招待講演】（仮）分子濃縮系としての生命現象を扱う分子集合体科学への挑戦（岸村顕広・九大工 CMS）
15:50-16:20　【招待講演】（仮）格子欠陥の立体表現（本田雅啓、原田啓之・PICFA）
16:20-16:50　【招待講演】金属野中の格子欠陥（湯浅元仁・同志社大理工）
16:50-17:20　【招待講演】技術に捉われない科学理解を求めて（石田翔太・日本画家）
17:20-18:20　個別討論（テーマごとの部屋を作成し、各部屋で興味を持った人同士が交流）
18:20-18:30　閉会挨拶

リプロダクティブ・ヘルス＆ライツ　ライトユニット

リプロダクティブ・ヘルス＆ライツの本邦での普及・浸透が企画グループのミッションです。

https://research.kyoto-u.ac.jp/gp/g060/
［関連情報］http://www.cpier.kyoto-u.ac.jp/unitlist/srhr-unit/
［関連情報］https://srhr-cse.peatix.com/view

本邦における Sexual and Reproductive Health and Rights（SRHR）の課題について、これまで医学、教育、社会学など各論で論じられていることを学際的に議論する場をオンライン上でつくり拡げることで、研究メンバーならびに市民の課題への姿勢を醸成する。

［メンバー］

中山健夫　京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻健康情報学分野　教授
池田裕美枝　京都大学医学部附属病院産科婦人科
柴田悠　京都大学大学院人間・環境学研究科　准教授
三谷はるよ　龍谷大学社会学部　准教授
後藤美賀子　国立成育医療センター妊娠と薬情報センター
宋美玄　丸の内の森レディースクリニック　院長
高橋幸子　埼玉医科大学医療人育成支援センター・地域医学推進センター　助教
小野美智代　国際協力 NGO ジョイセフ事務局
日吉和子　園田学園女子大学人間健康学部　講師
荒木智子　大阪行岡医療大学医療学部　助教
高木大吾　株）デザインスタジオパステル　代表取締役
June Low　京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻健康情報学分野　博士課程
八鍬奈穂　国立成育医療センター妊娠と薬情報センター
森臨太郎　京都大学大学院医学研究科　客員教授（国連人口基金・アジア太平洋地域事務所　地域アドバイザー）

▶企画内容（ワークショップ、セミナーなど）

本企画でリプロダクティブ・ヘルス・プロバイダーの視野がひろがることにより、日本で避妊や中絶、不妊治療、周産期医療、ホルモン治療などを受ける市民が、ひとりの人間として尊重され、より適切なケアを受けられるようになることを期待します。

とことん問おう！日本のリプロダクティブ・ヘルス＆ライツ　①SRHR と人口政策

2020 年 12 月 20 日（日）10:00-12:00
Zoom によるオンライン開催
・「UNFPA Asia Pacific Region からみた SRHR の動向と日本の課題」
　京都大学大学院健康情報学客員教授／UNFPA UNFPA Asia Pacific Region　森臨太郎先生
・グループディスカッション
・まとめ

とことん問おう！日本のリプロダクティブ・ヘルス＆ライツ　②SRHR と不妊治療

2021 年 1 月 24 日（日）10:00-12:00
Zoom によるオンライン開催
・「生殖補助医療とセクシャル／リプロダクティブ・ヘルス＆ライツ：SRHR にまつわる日本のこれまでの歴史と現在の課題」　明治学院大学社会学部柘植あづみ教授
・「不妊治療の現状：不妊治療当事者のニーズや倫理観、医療現場でのコミュニケーションについて」
　琉球大学病院周産期医療センター銘苅桂子教授
・グループディスカッション
・ディスカッションまとめ

とことん問おう！日本のリプロダクティブ・ヘルス＆ライツ　③包括的性教育

2021 年 2 月 11 日（木）10:00-12:00

Zoom によるオンライン開催

・講演

「生野南小学校・生きる教育」生野南小学校教諭　小野太恵子先生

・パネルディスカッション

埼玉医科大学　高橋幸子先生

命育　宮下由紀氏

生野南小学校　校長　木村幹彦先生

養護教諭　田中梓先生

教諭　小野太恵子先生

・グループディスカッション

・ディスカッションまとめ

ホテル利用学研究会

ホテル利用を切り口に、家族関係や健康、資産管理などの観点から、暮らしをより良いものにすることを目指す工夫について学び合ってきました。これからは学術的なアプローチを入れて、地域経済や人権・環境保護などへの社会貢献を考えていきたいです。

https://research.kyoto-u.ac.jp/gp/g061/
[関連情報] https://hotel.law.kyoto-u.ac.jp/

新型コロナウイルスの影響で、ビジネスホテルやシティホテルでは来日観光客や出張ビジネスマンが激減し、これを埋める「テレワーク」や「ワーケーション」などのためのプランが提供されています。宿泊費の国際的な予約システムや変動相場制が導入され、これまでの宿泊施設の法的区分に対応しない新しいサービスの需要と供給が生まれてきました。地域経済の持続可能な発展を目指しつつ、ホテル利用者としての消費者、労働者、青少年の権利と安全を守るには、どのような基本的視座をふまえなければならないでしょうか。本企画ではさまざまな専門分野の知見を集めて、ホテル利用の望ましい方向付けを素材にこの問題にアプローチしてみたいと思います。

［メンバー］

高山佳奈子　京都大学大学院法学研究科　教授（刑事法大講座）
馬強　京都大学情報学研究科　准教授
笠原秀一　京都大学学術メディアセンター　特定講師
渡辺玲　ホテル利用学研究家・ブロガー
舟橋栄二　トラベルライター

▶企画内容（ワークショップ、セミナーなど）

「新しい生活様式」は経済活動を縮小させていますが、同時に、新たなビジネスモデルやサービスも生じてきている。消費者、労働者、青少年として利用者の立場にある人を保護しながら、経済を活性化する工夫にも誘因を与えるには、どのような制度設計が望ましいでしょうか。この研究企画では、今大きく変動しているホテル利用を素材として、持続可能なビジネスを方向づけるための一般理論を考えていきたいと思います。第 1 回の研究会では、さまざまな専門職業の方から、主にホテル利用の現場についての知見や意見を出してもらいます。これを元に、第 2 回の研究会では、多方面からの学術的なアプローチで分析と社会的提言を展望します。

京都を元気にする「ホテル利用学」 ――暮らしと社会を考える多分野アプローチ――
＜第 1 回＞「ホテル会員権とは何か」

2020 年 12 月 12 日（土）9:30-11:45
Zoom によるオンライン開催

報告：渡辺玲氏「リゾート会員権論」
コメント：笠原秀一氏「観光情報学の視点から」
さまざまな立場でのホテル利用者の経験・問題意識の共有
全体討論

京都を元気にする「ホテル利用学」 ――暮らしと社会を考える多分野アプローチ――
＜第 2 回＞「学術としてのホテル利用学に向けて」

2021 年 2 月 6 日（土）13:00-16:00
Zoom によるオンライン開催

1．渡辺玲氏「ホテル利用学の全体像と社会的意義」
2．舟橋栄二氏「人生を豊かにする『観光でも仕事でもない』第 3 のホテル利用の実践報告
　――旅から旅へ、最高のシニア人生を目指して」
3．高山佳奈子氏「ホテル利用と人権保護の諸側面」
コメント：各分野の研究者・専門家から全体討論

IPECON(International Political Economy Conference)&I-1 グランプリ 2021
(国際政治経済学カンファレンス&
I-1 グランプリ(国際関係論最優秀学生グランプリ)2021 年)

「リベラル国際秩序再構築」はどのような課題を抱えているのか、学際的な研究が求められている。

https://research.kyoto-u.ac.jp/gp/g062/

アメリカ大統領のトランプからバイデンへの交替、COVID-19 パンデミックとワクチン供給の国際関係、バイデン政権のパリ協定復帰という状況の中で、「リベラル国際秩序再構築」はどのような課題を抱えているのか、国際政治学・国際経済政策論・社会学・疫学等、学際的な研究が求められている。本企画では、上記分野の欧米の研究者と日本の研究者が混沌とした国際情勢に指針を与えるため、討議する場を設ける。この分野で 2 つの課題を設定する。第一に、バイデン民主党政権の下での西側同盟国間のバードン・シェアリング（責任分担）という政策課題である。第二に、リアリズム・リベラリズムという国際関係の二大潮流を乗り越える理論的課題－英国学派ヘドリー・ブルが提起したアナーキカル・ソサエティ論のシンギュラリティ以降の国際社会秩序への適用である。また、こうした学問的開拓の担い手は、研究者だけではない。学部生の国際関係論への取り組みもまた重要である。コロナ下で大学の講義は面白くなくなっているので、かえって自分たちで ZOOM のような手段を用い、研究交流を活発化させようという趣旨である。自分たちが相互に語り合い、問題を発見することを率先して仕掛けなければならないのではないか（I-1(International -1)グランプリの開催)。

［メンバー］

坂出健　　京都大学公共政策大学院　准教授（国際政治経済学、サイバー・デモクラシー）
安武智就　　京都大学経済学部　2 回生
上岡利暉　　京都大学経済学部　2 回生

▶企画内容（ワークショップ、セミナーなど）

IPECON(International Political Economy Conference)&I-1 グランプリ 2021

Zoom によるオンライン開催

ラトゥールのアクター・ネットワーク論とブルデューのハビトゥス論に基づき、シンギュラリティ以降の都市における人間・国際的な都市のネットワークを想定する「新しい都市」論を国際関係の視点から考察する。

①IPECON：2021 年 2 月 18 日（木）21:40-24:00
基調報告 Hubert Zimmermann(Professor Politikwissenschaft, Universität Marburg)国際関係論
報告　Gabriele Vogt(Professorin für Japanologie (W3) Direktorin des Departments für Asienstudien)国際社会学・女性学
日本人研究者による報告(1～2 本)
②I-1 グランプリ：2021 年 3 月 16 日（火）～22 日（月）
報告一人 20 分質疑 5 分
統一テーマ－米中対立と国際政治経済秩序の行方
「トランプ外交政策の歴史的意義」「米中は覇権戦争を始めたのか?」(和歌山大学)
「米中貿易摩擦の経済史的アプローチ」（明治大学）
「GAFA　VS BATH」「アメリカ大統領選挙」（京都大学）
自由論題
「中国の海洋進出」「ドイツの移民統合政策」（京都大学）など
投票で最優秀報告を選ぶ(I-1)。
表彰式
講師講演（坂出）「バイデン民主党外交とリベラル国際秩序」
2021 年度 IPECON 方針議論「6 大学参加に向けて」

京都大学微細気泡研究会

微細気泡に興味のある方はどなたでもご参加お待ちしております。

https://research.kyoto-u.ac.jp/gp/g063/

微細気泡（ファインバブル、マイクロバブル、ナノバブル等）は，水中でナノ・マイクロスケールの気液界面を構成するため、微少な界面が多量に分散して存在する系が出現する。このため、微細気泡近傍では物理・化学反応や生化学反応に変化が生じ，農業生産分野を含め多方面で新たな現象が認められている。微細気泡を有効に活用し、新たな利用可能性を開拓するためには、気泡とそれを含有する水の理化学性や周囲に及ぼす影響を明らかにする基礎研究とそれによる学術的な深化が不可欠である。そこで、京都大学微細気泡研究会では、「特性解明」、「気液界面における振舞い」および「作用機序」を追究し、微細気泡とその近傍におけるプロセスを科学的に理解する研究会を開催する。これにより、分野横断型の研究を活性化させ、新しい微細気泡研究グループを構築する。

京都大学微細気泡研究会

［メンバー］

上田義勝　京都大学生存圏研究所　助教
吉川潔　京都大学エネルギー理工学研究所　特任教授
谷垣実　京都大学複合原子力科学研究所　助教
松本充弘　京都大学大学院工学研究科　准教授
濱本昌一郎　東京大学大学院農学生命科学研究科　准教授
徳田陽明　滋賀大学教育学部　教授
二瓶直登　福島大学農学群食農学類　准教授
高橋克幸　岩手大学理工学部システム創成工学科電気電子通信コース　准教授
Pan Li　同済大学环境科学与工程学院（中国）　准教授

▶企画内容（ワークショップ、セミナーなど）

うたかたの如く、消えそうで実は消えない微細気泡を、様々な視点で研究しませんか？

2021 年 12/7（火）－ 12/ 8（水）
京都大学宇治キャンパス〈きはだホール〉・　オンライン同時開催

応用研究は進んでいるけど、その基礎的な作用機序がまだはっきりわからない 微細気泡について、幅広い分野の研究者の皆様を招いて研究会を開催したいと思っています。

	JST Japan	CST China	発表者	タイトル	所属	発表時間
7-Dec-2021	13:00 — 13:10	12:00 — 12:10	Opening （開会あいさつ 吉川 潔）			
	13:10 — 13:40	12:10 — 12:40	濱本 昌一郎 Shoichiro HAMAMOTO	*多孔質媒体中における微細気泡挙動（仮題）*	東京大学農学生命科学研究科	30min
	13:40 — 14:10	12:40 — 13:10	二瓶 直登 Naoto NIHEI	*作物栽培への微細気泡投与効果について*	福島大学農学群食農学類	30min
	14:10 — 14:40	13:10 — 13:40	奥田 哲士 Tetsuji OKUDA	*浄水膜の洗浄への応用*	龍谷大学先端理工学部環境生態工学課程	30min
	14:40 — 15:10	13:40 — 14:10	藤岡 沙都子 Satoko FUJIOKA	*微細気泡の生成および物質移動（仮題）*	慶應義塾大学理工学部応用化学科	30min
	15:10 — 15:25	14:10 — 14:25				
	15:25 — 15:55	14:25 — 14:55	高橋 克幸 Katsuyuki TAKAHASHI	*ファインバブルを用いたプラズマ生成効率の向上*	岩手大学理工学部	30min
	15:55 — 16:25	14:55 — 15:25	中嶋 隆 Takashi NAKAJIMA	*溶存濃度およびレーザー駆動バブルの光学計測法の開発* *New optical approaches to study the dynamics of dissolved-gas-driven and laser-driven bubbles*	京都大学エネルギー理工学研究所	30min
	16:25 — 16:55	15:25 — 15:55	五島 崇 Takashi GOSHIMA	*ウルトラファインバブルの発生技術と安定化機構に関する実験的検証*	鹿児島大学理工学域工学系 理工学研究科	30min
	16:55 — 17:25	15:55 — 16:25	安田 啓司 Keiji YASUDA	*ウルトラファインバブルによる超音波合成した金ナノ粒子の粒子径制御と分散安定化*	名古屋大学工学部マテリアル工学科	30min
	17:25 — 17:55	16:25 — 16:55	細川 茂雄 Shigeo HOSOKAWA	*物質移動によるマイクロバブルの気泡径変化（仮題）* *Diameter change of micro-bubbles due to mass transfer*	関西大学社会安全学部	30min
	17:55	16:55	Closing (閉会)			
	18:30	17:30	意見交換会（変更の可能性あり、対面のみ）			

	JST Japan	CST China	発表者	タイトル	所属	発表時間
8-Dec-2021	10:00 — 10:30	9:00 — 9:30	松本 充弘 Mitsuhiro MATSUMOTO	*無機電解質によるバブル安定化のメカニズムをさぐる*	京都大学大学院工学研究科機械理工学専攻	30min
	10:30 — 11:00	9:30 — 10:00	谷垣 実 Minoru TANIGAKI	*Direct Measurement of the Internal Pressure of Ultrafine Bubbles by using Radioactive Nuclei as Probe(tentative)*	京都大学複合原子力科学研究所	30min
	11:00 — 11:30	10:00 — 10:30	秦 隆志 Takashi HATA	*ソノルミネッセンス増強効果を用いたウルトラファインバブルの評価手法に関する研究*	高知工業高等専門学校ソーシャルデザイン工学科	30min
	11:30 — 12:00	10:30 — 11:00	寺坂 宏一 Koichi TERASAKA	*非凝縮性ガスとスチームの混合蒸気の急速凝縮による新しいウルトラファインバブル水生成法*	慶應義塾大学理工学部応用化学科	30min
	12:00	11:00				
	International Workshop					
	JST Japan	CST China	Presenter	Title	Affiliation	Remarks
	13:30 — 14:00	12:30 — 13:00	Jun HU	*High density of the gas state inside nanobubbles*	Shanghai Institute of Applied Physics, Chinese Academy of Sciences, China	30min
	14:00 — 14:30	13:00 — 13:30	Pan LI	*Nanobubbles promote nutrient utilization and plant growth in rice and aquatic vegetation*	College of Environmntal Science and Engineering, Tongji University, China	30min
	14:30 — 15:00	13:30 — 14:00	Shu LIU	*The Mechanism of Hydrogen water's Alleviation effect to the Heavy Metal Oxidative Stress on Aquatic Organisms*	School of space and environment, Beihang University, China	30min
	15:00 — 15:30	14:00 — 14:30	Yoshikatsu UEDA	*Cleaning Effect of Utrafine Bubble Water Spraying by Orifice Nozzle(tentative)*	Research Institute for Sustainable Humanosphere, Kyoto University, Japan	30min
	15:30 — 15:45	14:30 — 14:45	Closing Ceremony (閉会)			
	15:45	14:45	ミニ研究室見学（対面のみ）			

超分野大喜利プロジェクト

自身の専門分野に関する理解と、異分野の視点を取り入れた新たな視点の創発を目的として、異なる専門分野を持つ者が対話する場を運営。

https://research.kyoto-u.ac.jp/gp/g064/
[関連情報] https://majime-zine.com/archives/1207

異なる分野を専門とする大学院生や若手研究者・社会人が集い、異分野融合的なおもしろい発想を創発させる対話の場。毎月、話題提供者をお迎えし、普段の研究や仕事の中で考えている問いを紹介し、その問いに対して参加者の専門分野の視点を活かして一緒に考えることで、専門分野を「超」えた視点の創造を目指す。

［メンバー］

桑島修一郎　京都大学大学院総合生存学館　特定教授（イノベーション論、産学連携論、科学技術政策論、X 線解析学）
武田秀太郎　京都大学大学院総合生存学館　特定准教授（計量サステナビリティ学、エネルギー経済学、核融合工学）
田中勇伍　公益財団法人地球環境戦略研究機関　研究員（エネルギーシステム、公共政策）
塩山皐月　京都大学大学院総合生存学館　一貫制博士課程 5 年　（比較教育学、ジェンダー学）
夫津木廣大　京都大学大学院総合生存学館　一貫制博士課程 4 年　（国際政治学、人道支援論）
大木有　京都大学大学院総合生存学館　一貫制博士課程 3 年　（ネットワーク科学、社会物理学）

▶企画内容（ワークショップ、セミナーなど）

毎回、話題提供者 1 名を招聘し、対話のテーマと問いの提示を行う。提示された問いに対して、参加者同士が数人のグループに分かれて対話を行う。また、異分野間の対話を促進するために、各グループには 2 名程度のファシリテーター（大学院生）が参加する。

形式：ワークショップ（オンライン、月 1 回程度の開催）
対象：大学院生、あるいは、修士号・博士号の取得した若手研究者や社会人。

サイバーデモクラシー　―サイバースペースと民主主義の関係―

2021 年 9 月 20 日（月・祝）15:00-18:00
話題提供者：奥井剛　京都大学ヒト生物学高等研究拠点（ASHBi）特定研究員
アラブの春から米国議会議事堂襲撃事件まで、ここ 10 年間の政治的変化はサイバースペース抜きでは語ることはできません。SNS が民主化運動に対して大きな役割を果たしてから、政府によるネット遮断、検閲強化の動きやフェイクニュースに扇動される群衆などサイバースペースと民主主義の関係が着目されています。

第 2 回　超分野大喜利　人類滅亡　滅びゆく宇宙の中で私たちはどう生きるか

2021 年 11 月 7 日（日）15:00-18:00
話題提供者：磯部洋明　京都市立芸術大学美術学部　准教授
2010 年代、人類を滅亡させる様々なリスクの回避・軽減について検討する研究プロジェクトが、世界中で立ち上がりました。人類がこれらのリスクに備えることの重要性は言うまでもありません。しかし、同時に超長期的に人類、あるいは地球で生まれた生命がいつか終わりを迎えることも、また確かなことです。いつか滅亡する人類にとって、持続可能性とは何をいつまで持続させることを意味しているのでしょうか？

第 3 回　超分野大喜利　死のフィクションを解体する

2021 年 11 月 28 日（日）15:00-18:00
話題提供者：松岡佐知　京都大学東南アジア地域研究研究所　研究員
死は誰でも確実に訪れますが、死後の世界は、誰も体験したことがありません。その絶対的な死と向き合って生き抜くために、人類は太古から「死」を意味づける論理を考え抜いてきました。どのようにこの世界は、私は、存在しているのか。その論理の結晶体である「死のフィクション」。

第 4 回　超分野大喜利　　ダイバーシティのゆくえ-Whither Diversity?-

2022 年 1 月 16 日（日）15:00-18:00

話題提供者：辻田俊哉　　関西外国語大学英語国際学部　准教授

2010 年代、大学や民間企業、官公庁等の様々な組織において、ダイバーシティ推進に関する取組がみられました。グローバル化が進展し、環境変化が加速する中、年齢、人種、国籍、ライフスタイルなど、様々な属性を持った人々が互いに認め合い、思考の多様性を活かすことで、新たな価値を生み出そうとすることが試みられてきました。一方で、国内外で「ダイバーシティ実現」に向けた課題は山積しているともしばしば指摘されます。

第 5 回　超分野大喜利　　2050 年脱炭素に向けて、暮らしを劇的に変えられるか？

2022 年 2 月 13 日（日）15:00-18:00

話題提供者：浅利美鈴　　京都大学大学院地球環境学堂　准教授

世界中が 2050 年までに化石資源に頼らない社会を目指した政策やスローガンを打ち出しています。しかし、実際に実現するには、私たちの暮らしや社会のあり様を劇的に変えねばなりません。それは実現できるのか？どうすれば？環境問題を出発点に、社会構造、政治、経済、教育、心理などなど、様々な視点から議論できればと思います。

第 6 回　超分野大喜利　　暴走する行政

2022 年 3 月 5 日（土）15:00-18:00

話題提供者：東修平　四條畷市長

ゆりかごから墓場まで。今や行政の領域は、それ以上に広がっているといっても過言ではありません。国民が政治家を選び、その政治家が行政を差配する。理論の上では、確かにそうかもしれません。では、ここまで肥大化した行政を、果たして私たちは本当にコントロールできているのか。そもそも、良い行政とは何なのか。

第 7 回　超分野大喜利　　価値のパラダイムシフトー「複素価値」の世界ー

2022 年 3 月 20 日（土）14:00-17:00

話題提供者：桑島修一郎　京都大学大学院総合生存学館　特定教授

日常において、仮に多数が重要だと思っていても社会全体では軽視されてしまう感覚を持ったことはないでしょうか？「弱者救済」「環境保全」「文化・芸術」「教育」などなど、特に経済合理性とは相容れない分野には価値の循環が起こりにくい。「価値観の多様化が必要だ！」と表面的には言われながらも、どうやって共感すればよいのかわからない。

複合国家イギリスを議論する思想史研究者の会

イギリスを複合国家として眺めるとその思想史叙述がどのように変わりうるのかを、異分野横断的にあれこれと議論したいと思います。

https://research.kyoto-u.ac.jp/gp/g065/

当初は全員が必ずしも顔見知りではありませんでしたが、「友達の友達」を連れてくるような形で、約 5 年前の外部資金獲得を機に研究会を組織しました。また 2016 年度にこの制度の支援でシンポジウムを開催し、その成果の一部を 2021 年 5 月に書籍として刊行しました。いま、今後の研究活動の展開を模索中です。

研究対象は 16 世紀から現代、対象領域は、イングランド、スコットランド、アイルランド、フランス、研究手法は、思想史学から現代社会論、文学、そして美学・哲学まで、多様な問題関心を持ちつつも共同研究する楽しさや、異文化との交流のワクワク感を共有できる仲間たちの集まりです。

［メンバー］

竹澤祐丈　京都大学経済学研究科　准教授（社会思想史）
岩井淳　静岡大学人文社会科学部　教授（西洋史）
木村俊道　九州大学法学研究院　教授（政治思想史）
桑島秀樹　広島大学総合科学研究科　教授（美学・哲学）
安武真隆　関西大学政策創造学部　教授（政治思想史）
森直人　高知大学人文社会科学部　准教授（経済思想史）
佐藤一進　神戸学院大学法学部　准教授（現代社会論・社会哲学）
武井敬亮　福岡大学経済学部　准教授（社会思想史）
中島渉　明治大学商学部　教授（文学）

▶企画内容（ワークショップ、セミナーなど）

「かみ合わない」議論への思想史学からの挑戦　イギリス複合国家論に関する歴史学との対話の試み

2021 年 9 月 22 日（水）
Zoom によるオンライン開催

異分野との交流を最深部で妨げているのは、実は研究者自身による学際研究への低い優先順位の付与なのではないか。なぜそうなるのかを念頭におきながら、イギリス複合国家研究を素材に思想史学と歴史学との対話を深化させるための議論を行いたいと思います。

対象書籍を、イギリス複合国家論の射程やその方法論、そして比較のための参照軸（フランス）などに関するメタレベルの議論を扱う 4 つの章と、具体的な論点を扱う 5 つの章とに分け、前者を午前、後者を午後の議論で取り扱う。対象章の執筆者、コメンテータ、そして他の参加者は可能な限り終日、議論に参加します。

開催趣旨の説明（9：20-9：30）
午前の部（9：30-12：30）：岩井、竹澤、安武、佐藤の各章
①米倉美咲（京都大学・院、16 世紀フランス史）
②那須敬（国際基督教大学、近世イングランド史）
③フロア全体での総合討論
（コメント：各 25 分、休憩 10 分、リプライ：合計 20 分（各 5 分）、総合討論：100 分）
午後の部（13：30-16：30）：木村、桑島、森、武井、中島の各章
①富田理恵（東海学院大学、近世スコットランド史）
②崎山直樹（千葉大学、アイルランド史）
③フロア全体での総合討論
（コメント：各 25 分、休憩 10 分、リプライ：合計 20 分（各 5 分）、総合討論：100 分）

Team Heritage

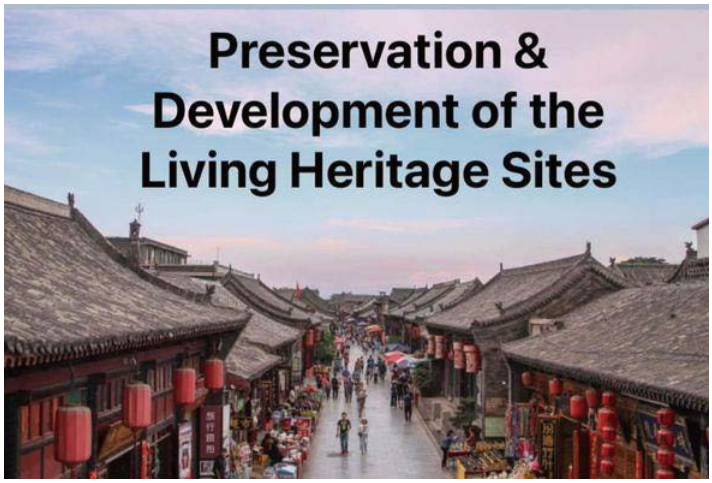
The purpose of this workshop is to examine ways in which living heritage sites can be preserved while developed, by supporting local communities' needs, lifestyles, industries, culture and art.

https://research.kyoto-u.ac.jp/gp/g066/

[Related Information] https://www.heritage-workshop.cseas.kyoto-u.ac.jp/

[Member]

Prof. Hayami Yoko,
(The director of CSEAS, Kyoto University)
Dr. Choshen Sabine
(An affiliated researcher at CSEAS, Kyoto University)
Dr. Arch. Nguyen Ngoc Tung
(Lecturer in Architecture Faculty, Hue University of Sciences)
Dr. Arch. Le Ngoc Van Anh
(Lecturer in Architecture Faculty, Hue University of Sciences)
Dr. Arch. Nguyen Vu Minh
(Lecturer in Architecture Faculty, Hue University of Sciences)
Ma. Arch. Nguyen Phong Canh
(Lecturer in Architecture Faculty, Hue University of Sciences)



▶Event contents（Workshop, Seminar, etc.）

Challenges and opportunities in the fields of heritage preservation and creative tourism development in the popular living heritage sites in Asia.

February 22, 2022
Zoom online

We aim to examine factors, opportunities and initiatives concerning sustainable heritage preservation and the 'creative development' of popular historic towns and villages which are in a stage of advanced heritage commoditization. We would like participants to present their work in the field of heritage preservation and tourism development in order to determine the most sustainable preservation and development approaches, as well as to brainstorm ideas regarding sustainable creative tourism development in the popular living heritage sites.

Opening Remarks
15:00 – 15:05: Prof. Yoko Hayami
15:05 - 15:10: Dr. Sabine Choshen
15:10 - 15:20: Brief introduction of all the participants
15:20 - 15:50: Keynote Speech: Prof. Nir Avieli
Disruptive Preservation: 25 years of research in the world heritage site of Hoi An, Vietnam (with some glimpses to Luang Prabang, Laos)
15:50 - 16:00: Response and Remarks from the Participants
Panel 1: Heritage Preservation and Tourism Spaces in Vietnam (Panel's chair: Prof. Nir Avieli)
16:00 - 16:10: Introduction of Speakers and Panel Theme, John Mensing
16:10 - 16:30: Ms. Franziska Susana Nicolaisen (co-author: Mirjam Le)
Tensions in local-global production of tourist spaces in Vietnam: heritage, global flows and local identities
16:30 - 17:00: Dr. Ngoc Tung Nguyen & Ms. Thuy Huong
Classification and Characteristics of French Colonial Architecture in Hue City

17:00 - 17:20: Panel 1 Discussion

17:20 - 17:30: Break

17:30 - 18:00: Keynote Speech, Prof. Christoph Brumann

There's life in the old house yet: The creative career of Kyoto's machiya heritage

Panel 2: How to Mediate Competing Claims for Authenticity and Development Priorities(Panel's chair: Prof. Christoph Brumann)

18:00 - 18:10: Introduction of Speakers and Panel Theme, John Mensing

18:10 - 18:30: Dr. Edoardo Gerlini

Kyoto as an Intangible Palimpsest

18:30 - 18:50: Ms. Nevena Tatovic and Prof. Filipe Themudo Barata

Living Heritage of One Holy Landscape: the Case of the Ovcar - Kablar Gorge

18:50 - 19:00: Break

19:00 - 19:20: Mr. Yutaka Hirako

Leh Old Town Conservation Project - Challenges to preserving "Living Heritage" with the Tibetan Heritage Fund's Community Based Conservation Approach

19:20 - 19:50: Discussion

Panel 3: Challenges to Living Heritage Sites in China

19:50 - 20:00: Introduction of Speakers and Panel Theme, John Mensing

20:00 - 20:20: Dr. Mingqian Liu

The Role of the Dongsi Hutong Museum in Community Preservation in Beijing

20:20 - 20:40: Mr. Xinlin Yang

Immersive Theater as a Domestic Chinese Tourism Attraction

20:40 – 20:50: Break

20:50 - 21:10: Dr. Sabine Choshen

The Impact of Heritage Commoditization on Lijiang's Old Town

21:10 - 21:30: Dr. Xiaobo Su

Heritage as Home: Tourism and the Experiences of Existential Authenticity in Lijiang, China

21:30 – 22:00: Panel 3 Discussion

Concluding remarks

「演劇×〇〇」超学際パラシュート部隊

「何かしらの予期しない相互作用が起こること期待して、あまり固定された目的を設定せず、ひとまず多様な領域から参加者を集めてまずは実践してみること」を重視している。

https://research.kyoto-u.ac.jp/gp/g067/
[関連情報] https://www.project.gsm.kyoto-u.ac.jp/accd/
[関連情報] https://www.accd-c.org/bunyaoudan2021/

PDCA 方式によるプロジェクトの遂行は、順序立ててものごとを進めて成果を出していく上で効果的です。一方で、当初に決めた「計画」があることで「研究者や実践者の自由な発想」に蓋をしてしまうこともある…。そんな自分自身の課題意識を乗り越えるために、本グループでは「パラシュート方式」による研究会を試行します。

「演劇×〇〇」というテーマに関心がある方は、どんな分野の方でも歓迎します。研究者だけでなく、実践者、市民の方も大歓迎です。芸術、教育、経済、経営、医療、福祉、工学、環境、etc…いろんな分野で集まって「演劇×〇〇」の実践を体験し、観察し、いわば「知のデパート」とでもいうような対話の場を構築します。

［メンバー］

蓮行	京都大学経営管理研究部 特定准教授（演劇、演劇教育、コミュニケーションデザイン）
末長英里子	京都大学経営管理研究部 特定助教
紙本明子	大阪大学大学院人間科学研究科 特任研究員
柴田惇朗	立命館大学大学院先端総合学術研究科 博士後期課程院生、日本学術振興会特別研究員 DC1

▶企画内容（ワークショップ、セミナーなど）

「演劇」に限らず、何かしらの芸術を他の分野と結びつける取組は、さまざまな分野において進んでいます。私（蓮行）が関わるプロジェクトだけでも、教育、医療、福祉、環境、防犯・防災、そして最近ではビジネスなど、多岐に渡ります。けれど、それらの分野を横断するような活動の場は、ほとんどありませんでした。本研究会では、さまざまな分野の研究者・実践者で集まり、「パラシュート方式」で「演劇×〇〇」の実践を体験し、観察し、いわば「知のデパート」とでもいうような対話の場を構築します。

第１回「演劇×教育」パラシュート研究会　ージャンル混合で「演劇×道徳」の授業を体験するー

2021 年 11 月 23 日（火・祝）
Zoom によるオンライン開催

第１回研究会では、「演劇×教育」の実践として、最前線で活躍するファシリテーター（演劇のアーティストでもあります）を招聘します。学校現場で実践を進めている「道徳」の模擬授業を体験いただくと共に、その授業内容について多分野の参加者同士でディスカッションします。また、研究会でのディスカッションを通じて、分野横断型の対話を進める方法論としての「パラシュート方式」についても検討を進めます。

●研究会の内容

13:00-14:00　演劇的手法を用いた授業プログラムの模擬授業体験＆観察
14:00-15:00　「演劇×教育」の取り組みに関するディスカッション
15:00-16:00　「パラシュート方式」の方法論に関するディスカッション

第２回「演劇×教育」パラシュート研究会　ージャンル混合で演劇ワークショップを体験するー

2021 年 12 月 26 日（日）
Zoom によるオンライン開催

第 2 回研究会では、「演劇×教育」の最前線で活躍するファシリテーター（演劇のアーティストでもあります）をお呼びし、学校現場で実践を進めている「演劇ワークショップ」を体験いただくと共に、その内容について多分野の参加者同士でディスカッションします。

●研究会の内容
13:00-14:00　演劇ワークショップ体験＆観察
14:00-15:00　「演劇×教育」の取り組みに関するディスカッション
15:00-16:00　「パラシュート方式」の方法論に関するディスカッション

第３回「演劇×教育」パラシュート研究会　ージャンル混合で演劇ワークショップを体験するー

2022 年 2 月 26 日（土）
Zoom によるオンライン開催

第 3 回は、学校現場において実際に行われた演劇の授業（映像）を観察し、ジャンル混合でディスカッションを行う内容を予定しています。

●研究会の内容
14:00-15:00　「演劇×教育」授業実践ダイジェスト映像の視聴
15:00-16:00　ディスカッション
16:00-17:00　「パラシュート方式」に関するディスカッション

臨床経営研究会

経営学者が、実践家（起業家、経営者、投資家など）、他分野の研究者、組織と生きる人びとと対話しながら、経営学の知識の使用と創造に従事する。私たちは、こうした活動の母体と集積を臨床経営学と呼びたいと考えている。

https://research.kyoto-u.ac.jp/gp/g068/

臨床に興味を持つ経営学者が、実践家（起業家、経営者、投資家 etc.）や臨床的な研究を行っている他分野の研究者と対話しながら、臨床経営学という人びとの生活感覚（喜怒哀楽、生死、意味や物語）に根ざした新たなジャンルを生み出したいと考えている。

［メンバー］

伊藤智明　京都大学大学院経営管理研究部　特定助教（経営学）
伊達洋駆　株式会社ビジネスリサーチラボ　代表取締役（経営学）
服部泰宏　神戸大学大学院経営学研究科　准教授（経営学：組織行動論、人的資源管理論）
井出和希　大阪大学感染症総合教育研究拠点　特任准教授（社会医学）
柳沢究　京都大学大学院工学研究科　准教授（建築学：建築計画学、住居学、建築設計）
樋口あゆみ　福岡大学商学部　講師（社会学）
福本俊樹　同志社女子大学現代社会学部　助教（経営学）
舟津昌平　京都産業大学経営学部　助教（経営学）
山田仁一郎　京都大学大学院経営管理研究部　教授（経営学）
吉田満梨　神戸大学大学院経営学研究科　准教授（商学）
若林靖永　京都大学大学院経営管理研究部　教授（商学）

▶企画内容（ワークショップ、セミナーなど）

第 1 回臨床経営学フォーラム　－経営学者による起業と経営：周縁にいることの大切さと難しさ－

2021 年 12 月 26 日（日）14:00-17:00
Zoom によるオンライン開催

経営学者が、実践家、異分野の研究者、組織と生きる人びとと対話しながら、経営学の知識の使用と創造に従事する。私たちは、こうした活動の母体と集積を臨床経営学と呼びたいと考えています。
この着想から、第 1 回臨床経営学フォーラムでは、「経営学者による起業と経営」をテーマに、話し手、聞き手、ファシリテーターを中心に「周縁にいることの大切さと難しさ」を考えていきます。また、臨床経営学フォーラムは、やまだようこ氏が提唱するビジュアル・ナラティヴの方法論を参照しながら、約 2 時間の物語を参加者と共に即興的に上演する、というイメージで進めようとしています。

1. はじめの挨拶
   福本俊樹氏（同志社女子大学現代社会学部・助教）
2. 対話
   話し手
   伊達洋駆氏（株式会社ビジネスリサーチラボ 代表取締役）
   聞き手
   やまだようこ氏（京都大学名誉教授、立命館大学 OIC 総合研究機構上席研究員、ものがたり心理学研究所長）
   服部泰宏氏（神戸大学大学院経営学研究科 准教授）
   吉田満梨氏（神戸大学大学院経営学研究科 准教授）
   ファシリテーター
   伊藤智明氏（京都大学経営管理大学院 特定助教）
3. おわりの挨拶
   山田仁一郎氏（京都大学経営管理大学院 教授）

第 2 回臨床経営学フォーラム　－経営者と経営学者のパートナーシップ－

2021 年 12 月 26 日（日）13:30-16:30
Zoom によるオンライン開催

経営学者が、実践家、異分野の研究者、組織と生きる人びとと対話しながら、経営学の知識の使用と創造に従事し、経営に役立つことと経営を深く理解することの両立を目指していく。私たちは、こうした活動の母体と集積を臨床経営学と呼びたいと考えています。
この着想から、第 1 回臨床経営学フォーラムでは、「経営学者による起業と経営」をテーマに、話し手、聞き手、ファシリテーターを中心に「周縁にいることの大切さと難しさ」についての対話を行いました。第 2 回臨床経営学フォーラムでは、「経営者と経営学者のパートナーシップ」をテーマに、経営者にとっての経営学者とは、どのような存在であるか、また、どのような存在になり得るかを対話しながら、参加者と一緒に考えられたらと思っています。

1. はじめの挨拶
   伊藤智明氏（京都大学経営管理大学院 特定助教）
2. 対話
   話し手
   木村祥一郎氏（木村石鹸工業株式会社・代表取締役社長）
   山縣正幸氏（近畿大学経営学部・教授）
   聞き手
   石田翔太氏（日本画家）
   岩尾俊兵氏（慶應義塾大学商学部・専任講師）
   牧野成史氏（京都大学大学院経済学研究科・教授）
   司　会
   服部泰宏氏（神戸大学大学院経営学研究科・准教授）
3. おわりの挨拶
   伊達洋駆氏（株式会社ビジネスリサーチラボ・代表取締役）

陶磁器の化学

色鮮やかな陶磁器の光彩は何故そんなに美しいのか？美しさの起源を科学的に明らかにし、美しさを一層深く味わいましょう。科学のみならず、陶器の歴史や文化財保護の観点からも、陶磁器の光彩について考えてみましょう。

https://research.kyoto-u.ac.jp/gp/g069/

華やかな黄金の光彩を呈する金彩備前や、白い黄金と称される東洋の白磁器が示すベトガー光沢など、現代に至っても未だ分子レベルでの呈色メカニズムが不明な陶磁器に対して、化学、物理学、生物学の叡智を結集し、その解明に挑む。

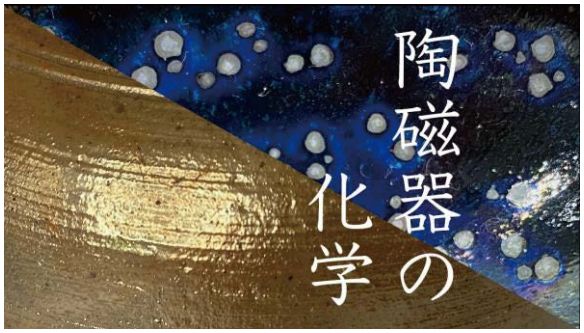
［メンバー］

佐々木善浩　京都大学工学研究科　准教授（有機－無機ハイブリッド化学）
井田大地　京都大学工学研究科　准教授（高分子化学物理）
宇治広隆　京都大学工学研究科　助教（ペプチド化学）

▶企画内容（ワークショップ、セミナーなど）

陶磁器の化学　第１回ワークショップ「無機・有機・高分子化学の視点から陶磁器の光彩発現に迫る」

2022 年 10 月 1 日（土）
京都大学吉田キャンパス 百周年時計台記念館 会議室 III



彩色豊かな陶磁器の中には、陶磁器原料に含まれる金属、金属酸化物、金属イオンに由来する光彩を呈するものがある。このような光彩は、900 °C以上の高温下、酸化ケイ素を主とする溶融ガラス中における各金属種が関わる化学反応や結晶成長はもとより、溶融ガラスの非平衡ダイナミクスなど、様々な時空間スケールにおける化学・物理現象が複雑に絡み合って実現していると考えられる。本シンポジウムでは、無機化学、有機化学、高分子化学の各分野の研究者が集い、陶磁器の光彩発現機構の解明に向けた、各分野からのアプローチについて議論する。

11:00-11:15　開会の挨拶（井田大地、京都大学大学院工学研究科）
11:15-12:15　白勢洋平（愛媛大学 大学院理工学研究科）
「陶磁器と粘土鉱物の科学」
12:15-13:00　休憩
13:00-14:00　横山操（京都大学 大学院農学研究科）
「文化財研究におけるメンバーネットワークの作り方」
14:00-15:00　樫村京一郎（中部大学 工学部）
「マイクロ波焼成技術の陶磁器科学への応用」
15:00-15:30　休憩
15:30-16:30　高谷光（帝京科学大学 生命環境学部）
「文化財と放射光分析」
16:30-18:00　パネルディスカッションおよび総合討論
宇治広隆（京都大学大学院工学研究科）
西正之（京都先端科学大学工学部）
山田陽一（理化学研究所）
筒井忠仁（京都大学大学院文学研究科）、及び講演者
18:00-18:15　閉会の挨拶（佐々木善浩、京都大学大学院工学研究科）

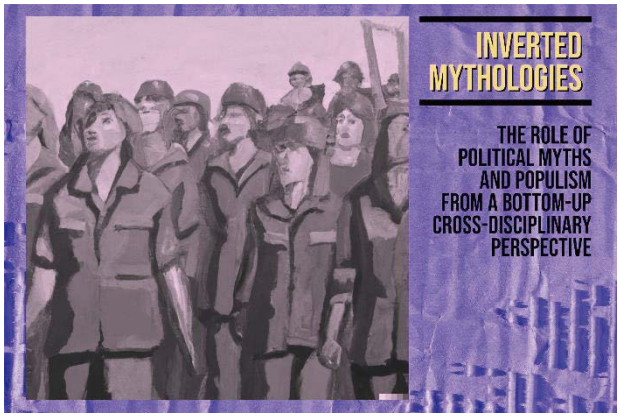
Everydayness Research Group

Our objective is to investigate in an interdisciplinary way different social phenomena that occur in the field of the "everyday". We are particularly interested in the formation of popular civil movements and in the microhistories that account for these processes.

https://research.kyoto-u.ac.jp/gp/g070/

[関連情報] https://sites.google.com/view/everydaynessresearchgroup/inicio

We are a research group based in Kyoto University focused on the concept of everydayness and its different constellations. We are interested in reviving the philosophy of Tosaka Jun, Miki Kiyoshi, Nakai Masakazu and Nakamura Yūjirō and how to apply their ideas to contemporary political movements.



[Member]

Dr. Fernando WIRTZ, Kyoto University, Assistant Professor, Japanese Philosophy

Dr. Nobuyuki MATSUI, Ritsumeikan University, Assistant Professor, Global Studies

MA. Norihito NAKAMURA, Kyoto University, PhD Candidate, Human and Environmental Studies

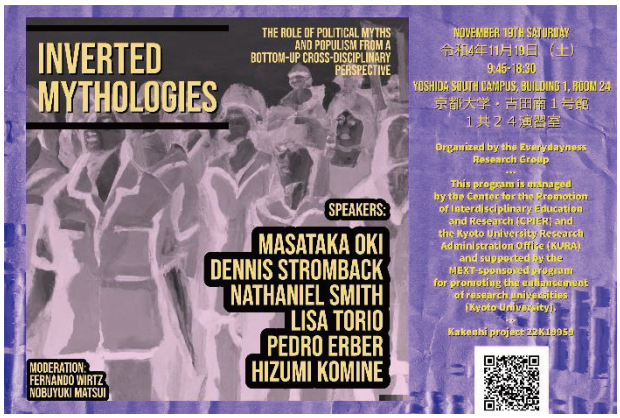
▶Event contents（Workshop, Seminar, etc.）

Inverted Mythologies: The Role of Political myths and populism from a bottom-up cross-disciplinary.

Date: 令和４年 11 月 19 日 （土曜日）

Place: 吉田南１号館　１共２４演習室

Nippon Ishin no Kai in Japan, Bolsonaro in Brazil, AFD in Germany, the advance of so-called populist political movements is usually studied on the basis of how leaders construct manipulative rhetorics, which are normally called "political myths". This workshop attempts to rethink this problem from the interdisciplinary perspective of philosophy, political science, sociology, and religion in order to understand how the "masses" or the "people" also construct their own narratives. That is to say, not how the political rhetorics are constructed on the side of the political marketing, but how the people also is active constructing their own “political myths”



Program

9:45-10:00	Welcome words, presentation
10:00-11:00	Panel 1: Masataka OKI, “Toward an Introspective Analysis of the Need for a Myth. Revisiting the Theories of Imagination in Early Modern Political Thought”
11:00-12:00	Panel 2: Dennis STROMBACK, “Populism ≠ Not Populism = Populism: Asserting Populism through Negating Populism from the Standpoint of El Pueblo”
12:00-13:00	Lunch
13:00-14:00	Panel 3: Nathaniel M. SMITH, “Martyrdom and Lionization of Activists on the Right in Japan”
14:00-15:00	Panel 4: Lisa TORIO, “The Spirit of Abstraction and the ‘Mass Man’: Exploring the Possibilities and Limits of Collective Movements Through Gabriel Marcel’s Philosophy”
15:15-15:30	Break
15:30-16:30	Panel 5: Pedro ERBER, “Bolsonaro’s Brazil and Neoliberalism as Political Mythology”
16:30:17:30	Panel 4: Hizumi KOMINE, 「お笑いとポピュリズム―TV ディレクター・吉村誠の場合―」
17:30-18:30	General Discussion

「美を必要とする歴史プロジェクト」
京大・東大文理融合研究グループ

まだ始まったばかりのプロジェクトですが、自由で柔軟な発想を第一に、大きな問題に挑戦したいと考えています。

https://research.kyoto-u.ac.jp/gp/g071/

[関連情報] http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/staff/ryuhei-ueda/

[関連情報] https://research.kyoto-u.ac.jp/documentary/d034/

本企画グループは、古典から現代に至る絵画や文学に描かれる「人物顔貌」の表現からその文化・時代的背景を考察する人文学的視点と、鑑賞者の主観的体験の背後にある心理的メカニズムの理解を目的とした認知科学的視点、双方の問題意識を共有した新しい分野横断的な研究チームである。

［メンバー］

上田竜平　京都大学人と社会の未来研究院 助教（認知神経科学）
永井久美子　東京大学大学院総合文化研究科 准教授（日本古典文学、比較文学比較文化）
笠原真理子　東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター 特任研究員（ヨーロッパ文学、芸術論）
平澤加奈子　東京大学史料編纂所 シニア URA（歴史学）

▶企画内容（ワークショップ、セミナーなど）

人物顔貌の芸術表現とその認知：人文学・認知科学・制作からのアプローチ

2022 年 12 月 9 日（金）
京都大学時計台記念館　会議室 III
（Zoom を利用したハイブリッド形式で開催）

「顔」は古今東西の絵画作品に見られる、普遍的なモチーフである。一方でその表現方法には、文化や歴史的背景、そして制作者の意図を見ることができる。この問題について本シンポジウムでは、様々な分野の専門家による話題提供を通し、議論を行う。話題提供者として、比較文学・比較文化研究を専門とする研究者、顔認知に関する心理学的研究を専門とする研究者、そして実際に制作活動を行なっているアーティストが登壇する。これら異なる分野間の交流を通し、将来の分野横断研究で解決されるべき問いと、そのアプローチについて模索する。

右から AI 生成画像（イメージナビ株式会社）
ウィキペディアのパブリックドメインより引用
（太宰治：自画像（ゴッホ）： ピート・モンドリアン）

13:50　受付開始
14:00　開会の挨拶
14:10　永井久美子（比較文化・比較文学、東京大学大学院総合文化研究科・准教授）
　　「光源氏の<美>と<老い>と浦島伝説」
14:50　鈴木敦命（認知心理学、東京大学大学院人文社会系研究科・准教授）
　　「顔貌に基づく人物の認知：進化の副産物か文化の構築物か」
15:20　大竹彩奈（日本画家）
　　「『美しい顔』が出来上がるまで–制作の視点から–」
16:00　井上章一（風俗史学、国際日本文化研究センター・所長）
　　「細川ガラシャを美形にしたのは誰なのか」
16:30　総合討論
17:00　閉会

Mindful Living Research Group

The academic field of "mindfulness" has emerged at the confluence of Asian wisdom traditions and modern medicine and psychology. In this Kyoto symposium, we will envision its relevance and benefits for higher education, by adopting both an interdisciplinary and a cross-cultural approach.

https://research.kyoto-u.ac.jp/gp/g072/

[Related Information] https://www.gsais.kyoto-u.ac.jp/trg/mlrg/index.html

The Mindful Living Research Group is a graduate and post-graduate seminar focusing on "mindful living," in search for the "good life" in the 21st century. We organize regular research meetings, reading group, mindfulness practice, interdisciplinary workshops, cultural activities, collaborating together on academic publications and social applications.

[Member]

Deroche Marc-Henri	京都大学大学院総合生存学館 准教授（Buddhist studies, cross-cultural philosophy, philosophy of mindfulness）
楠本亮太郎	京都大学大学院総合生存学館 博士課程（4年生）（Philosophy of education, philosophy of mindfulness in higher education）
Rappleye Jeremy	京都大学大学院教育学研究科 准教授（Philosophy of education, Kyoto School）
上床輝久	京都大学医学部附属病院精神科神経科 助教（Psychiatrist, Psychologist）
岸本早苗	京都大学大学院医学研究科健康増進・行動学分野 客員研究員（Psychologist, certified teacher in Mindfulness-Based Stress Reduction）
KUYKEN Willem	University of Oxford, Department of Psychiatry - Oxford Mindfulness Center Professor, Director（Psychiatrist, Psychologist, developer of Mindfulness-Based Cognitive Therapy）
井本由紀	慶応義塾大学理工学部外国語・総合教育教室 専任講師（Anthropology of education, anthropology of mindfulness in higher education）

▶Event contents（Workshop, Seminar, etc.）

「高等教育におけるマインドフルネス即ち正念正知——東洋と西洋の観点」
"Mindfulness in Higher Education: East-West Perspectives"

Date: Saturday 10th December 2022
Venue: Hybrid
-On-site: At Higashi Ichijokan Kyoto University, 2F Conference Room
- Online: Zoom link will be provided to registered participants

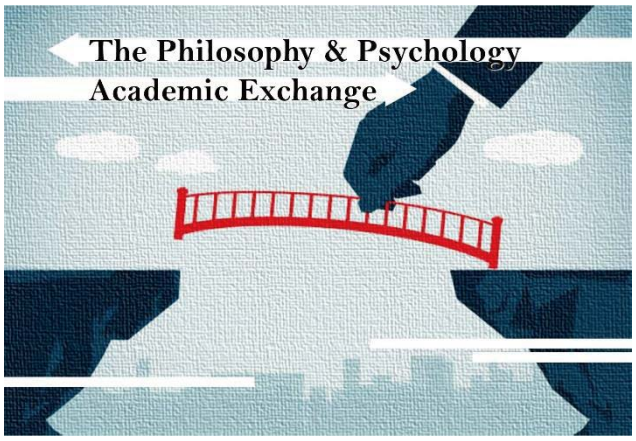
"Mindfulness," an English term originally translating the Buddhist concept of sati in Pāli (Chinese 念), has become a major umbrella-term in order to integrate meditation techniques in modern psychology and medicine. In this symposium, we will re-envision the signifiance of so-called mindfulness-based interventions for higher education, by combining Eastern and Western perspectives, and bridging classical humanities with cognitive sciences. We will thus explore how mindfulness, or more precisely "mindful awareness" (sati-sampajañña 正念正知), can be considered as the pillar for educating the whole person.

17:00-18:00 Keynote Address
"Mindfulness (-Based Cognitive Therapy) Comes of Age"
By Willem Kuyken, PhD, DClinPsy, Professor, Oxford University, Director of Oxford Mindfulness Centre
18:00-18:30 Questions and Answers
18:30-18:45 Break
18:45-19:05 "'Coming to Our Senses' in Higher Education:Considerations of Culture and Pedagogy"
By Yuki Imoto, PhD, Senior Assistant Professor, Keio University
19:05-19:25 "Mindful Awareness as the Pillar of Learning: Study, Reflection, and Cultivation"
By Marc-Henri Deroche, PhD, Associate Professor, GSAIS, Kyoto University
19:25-19:45 "How To Promote Evidence-Based Mindfulness in University Hospitals?
A Report of a Practice-Oriented Group and Prospects for Scientific Research"
By Teruhisa Uwatoko, MD, PhD, Assistant Professor, Kyoto University Hospital
19:45-20:15 General Discussion and Concluding Remarks

The Philosophy and Psychology Academic Exchange

In this project we bring together researchers working in philosophy and psychology to evaluate competing theoretical frameworks of the mind.

https://research.kyoto-u.ac.jp/gp/g073/



Since both philosophical and psychological models of the mind generate interest amongst laypeople as well as professionals, we hope that the results of our discussion will be relevant to participants from outside of our disciplines. Through fostering discussion between philosophers and psychologists we hope to help improve the general level of understanding of the complexities and controversies within contemporary scientific theories of the mind.

［Member］

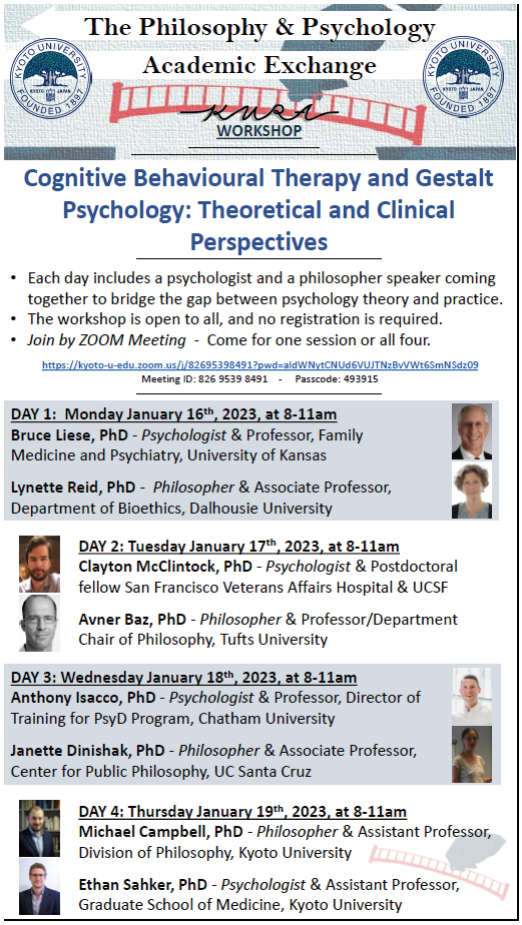
Michael Walter CAMPBELL, PhD
Assistant Professor, Department of Ethics, Kyoto University

Ethan SAHKER, PhD
Assistant Professor, Population Health & Policy Research Unit, Medical Education Center & Department of Health Promotion and Human Behavior, Graduate School of Medicine / School of Public Health, Kyoto University

▶Event contents（Workshop, Seminar, etc.）

Cognitive Behavioural Therapy and Gestalt Psychology: Theoretical and Clinical Perspectives

Date: Monday January 16th – Thursday January 19th , 2023
Venue: ZOOM – link to be supplied prior to the event



In psychotherapy, cognitive behavioural therapy (CBT) is currently the dominant paradigm. However, CBT represents only one approach of many therapeutic practice modalities. Non-CBT practices such as Gestalt therapy, existential psychology and traditional (Freudian or post-Freudian) psychoanalysis have their own proponents and remain influential. Moreover, CBT itself is not a single unified approach but encompasses a variety of different forms. A gap between theory and practice has always existed within each respective field but working together can help to bridge this gap to create a more comprehensive understanding of these important theories. We intend to examine the theoretical foundations of CBT, including its origins from the cognitive revolution in the theory of mind, and comparing it to alternative frameworks such as Gestalt psychology. We will examine the relation between therapeutic practice and theoretical accounts of the mind. By bringing together psychologists and philosophers we hope to illuminate these issues through consideration of a wide range of perspectives. Since both philosophical and psychological models of the mind generate interest amongst laypeople as well as professionals, we hope that the results of our discussion will be relevant to participants from outside of our disciplines. Through fostering discussion between philosophers and

psychologists we hope to help improve the general level of understanding of the complexities and controversies within contemporary scientific theories of the mind.

Symposium Title: Cognitive Behavioural Therapy and Gestalt Psychology: Theoretical and Clinical Perspectives

Time: Monday, January 16th – Thursday January 19th, 8:00-11:00am JST

Location: ZOOM – link to be supplied prior to the event

	US Sun 1/15/23 Japan Mon 1/16/23	**US Mon 1/16/23** Japan Tues 1/17/23	**US Tues 1/17/23** Japan Wed 1/18/23	**US Wed 1/18/23** Japan Thu 1/19/23
8:00 JST 15:00 PST 17:00 CST 18:00 EST	Michael Campbell 10 min.	Michael Campbell 10 min.	Ethan Sahker 10 min.	Michael Campbell 60 min.
8:10 JST 15:10 PST 17:10 CST 18:10 EST	Bruce Liese 60 min.	Clayton McClintock 60 min.	Anthony Isacco 60 min.	
9:10 JST 16:10 PST 18:10 CST 19:10 EST	Lynette Reid 60 min.	Avner Baz 60 min.	Janette Dinishak 60 min.	Ethan Sahker 60 min.
10:10 JST 17:10 PST 19:10 CST 20:10 EST	Ethan Sahker 20 min.	Ethan Sahker 20 min.	Michael Campbell 20 min.	Open Forum 30 min.
10:30 JST 17:30 PST 19:30 CST 20:30 EST	Open Forum 30 min.	Open Forum 30 min.	Open Forum 30 min.	

Urushi team

An interdisciplinary group of researchers interested in urushi, with expertise spanning from organic chemistry to archeology.

https://research.kyoto-u.ac.jp/gp/g074/

Urushi can be a key renewable material for future electronic devices, and, at the same time, a better chemical understanding of this material and the development of new synthetic analogues, can also contribute to the conservation of ancient Asian cultural assets and revitalize ancient crafts.

[Member]

Pincella Francesca	Kyoto University Institute for Chemical Research, Senior lecturer（materials science）
Nakamura Masaharu	Kyoto University Institute for Chemical Research, Professor（organic chemistry）
Wu Beiling	Kyoto University Institute for Chemical Research, graduate student（organic chemistry）
Forte Erika	Kyoto University Institute for Research in Humanities, Professor（art history）
Mineo Keito	Kyoto University Institute for Chemical Research, Researcher（forest policy and economics）

▶Event contents（Workshop, Seminar, etc.）

Past, present and future of Asian lacquer: urushi from art to electronics

Date: December 12, 2022
Venue: hybrid event
Online: Zoom
Physical venue: Yoshida campus, building 61 – Research administration Building, Seminar room B1.

The need for sustainable materials to replace oil-derived ones has renewed the interest toward a traditional resin that has long been used in Asian countries, urushi or Asian lacquer, originating from the sap of Rhus verniciflua (or, more appropriately, Toxicodendron vernicifluum).
Urushi has long been employed as a coating and adhesive material for both practical and esthetical purposes, but more recently applications in fields such as biomedical and electronics have been proposed and successfully demonstrated.
One of the main limitations regarding research on urushi is linked to the difficult task of collecting the raw sap and the time-consuming preparation of the lacquer, another issue is linked to its difficult analytical characterization once the natural lacquer has polymerized, due to its high degree of cross-linking and insolubility in either organic solvent or acids and bases.
This conference aims to bring together the main experts in the synthesis, characterization and application of urushi, spanning from conservation of ancient artifacts to the synthesis of novel electronic devices.

The invited speakers list is:
Prof. Shimode, Kyoto Sangyo University, urushi art
Prof. Erokhin, CNR-IMEM and University of Parma, soft biomimetic electronic materials
Prof. Hashimoto, Tsukuba university, urushi circuit
Prof. Bonaduce, University of Pisa, state of the art analytical characterization of urushi
Dr. Tamburini, British Museum, urushi characterization and conservation

Prof. Otani, Kyoto University, archeology
Prof. Dannoura, Kyoto University, tree physiology.

Program:

•15:30-15:40: Dr. Francesca Pincella and Prof. Erika Forte, welcome remarks.

First oral session (15:40-17:10), chair: Prof. Forte

•15:40-16:10: Prof. Yutaro Shimode, “The restoration of Kodai-ji Maki-e”

•16:10-16:30: Mr. Yuta Nishatani, “Formation and structure of the inner bark and the resin canals of Urushi”

•16:30-16:50: Prof. Ikue Otani, “Lacquerware in East Asia: the overview of the archaeological issue and some reports of the interdisciplinary co-working”

•16:50-17:10: Prof. Ilaria Bonaduce, “The molecular characterisation of urushi lacquer films”

Coffee break

Second oral session (17:20-18:40), chair: Dr. Pincella

•17:20-17:40: Prof. Yuki Hashimoto, “Development, verification, and application of a urushi-based electronic circuit”

•17:40-18:00: Dr. Diego Tamburini, “Asian lacquers in museum collections – challenges in their characterisation and conservation”

•18:00-18:20: Prof. Victor Erokhin, “Fundamentals of organic neuromorphic systems”

•18:20-18:40: Prof. Masaharu Nakamura and Dr. Keito Mineo, closing remarks.

Dinner break

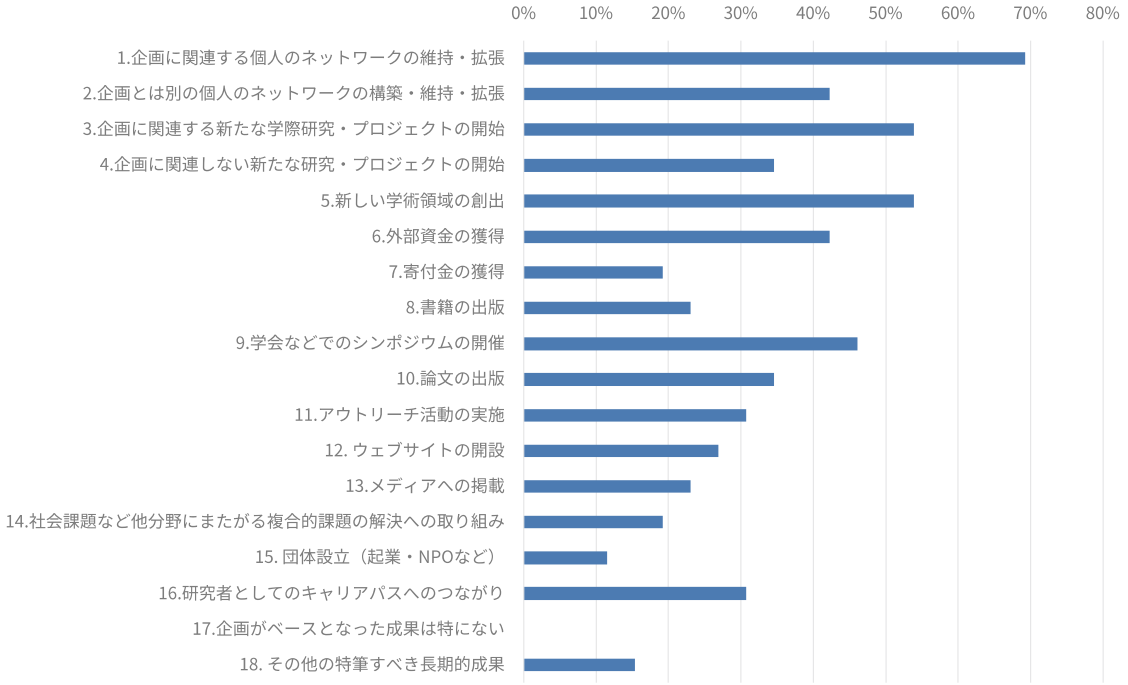
Roundtable session (19:30-20:30)

2021 年実施アンケート結果

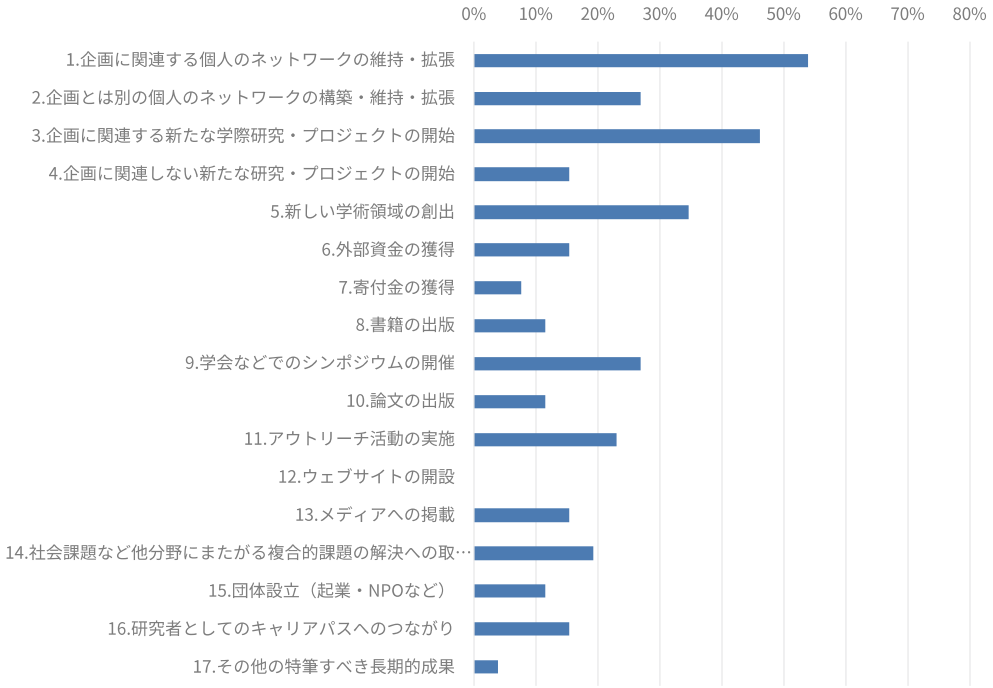
アンケート概要

・アンケート期間：2021 年 11 月 2 日～11 月 30 日
・アンケート対象：2013 年度～2020 年度採択企画代表者（43 名；宛先不明を除く）
・アンケート回収率：56.5 %　（複数回採択に伴う複数回回答を含む 26 件）

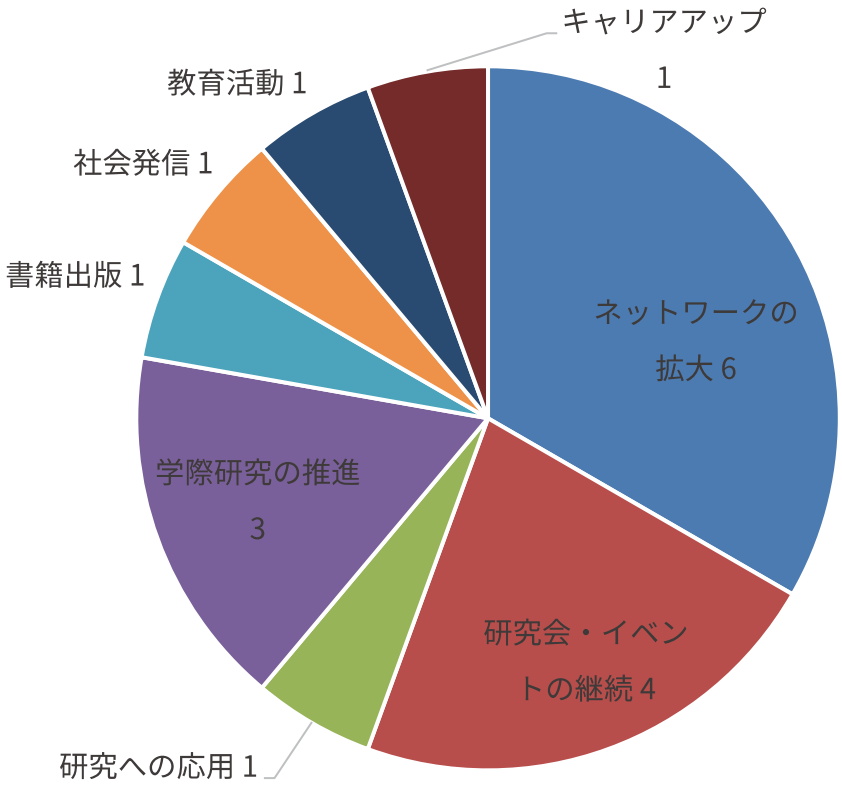
Q1：企画が終了してから現在までの間で、本事業での活動がベースとなって得られたと考えられる成果



Q2：Q1 のうち本事業があったからこそ達成できたと思われる成果



Q3：本事業の支援の中で、支援後のご自身の研究につながる印象深いことは



自由記述内容（回答者が特定されないよう、一部抜粋）

・報告書を関係の多方面に送付したことにより、分野横断的な研究者の人脈や企業の方々とのつながりができた。（ネットワークの拡大）

・学部学生、大学院生とのコラボという意味でのつながりも印象深い。（ネットワークの拡大）

・学際性だけではなく、研究者以外を多く招聘して会議を実施したこと。反響が大きかった。（ネットワークの拡大）

・大学外機関との連携やコラボができるようになった。　（ネットワークの拡大）

・異分野とのコラボレーションや学際領域の開拓は、それぞれの学問分野の中核から離れている活動であり、また短期的に成果を上げにくいこともあり、自覚的にも無自覚的にも、優先順位を低くつける傾向があると思います。しかしながら、こういった支援事業を利用することができれば、そのハードルを下げることができ、結果として、長期的な研究の種まきのようなことがしやすくなり、ありがたく利用させていただきました。（学際研究の推進）

・Web メディアでの研究・教育成果の掲載。（社会発信）

・本事業で開催した WS をきっかけに、大学院横断講義を開設することができた。（教育活動）

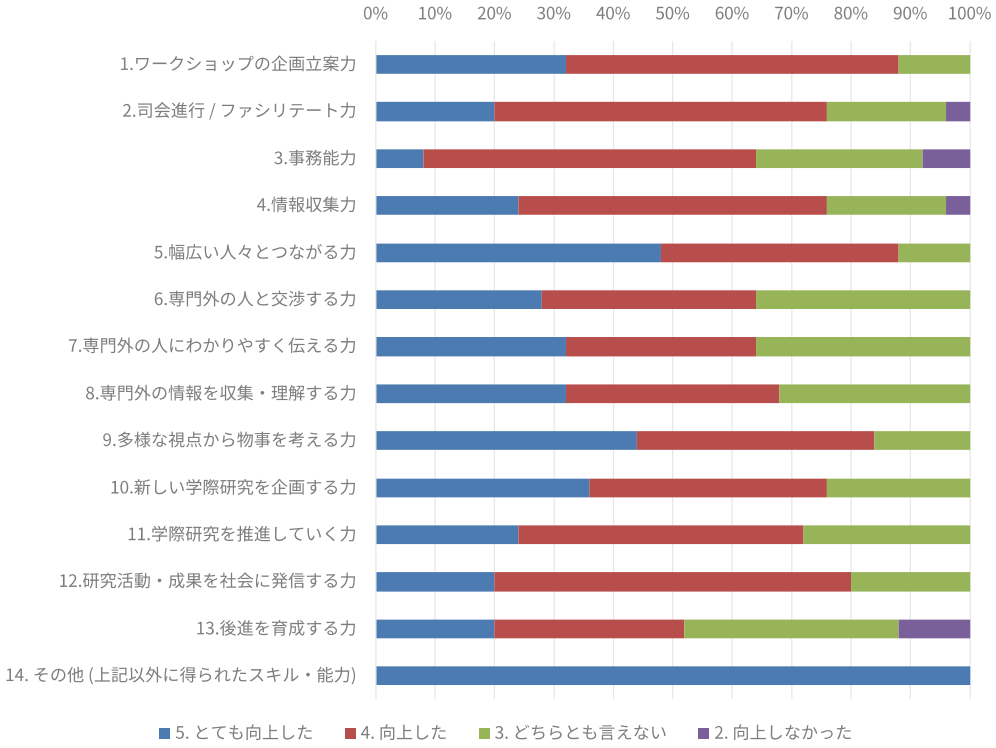
・国際・学際研究会活動を通じて、異分野交流がさらに活性化されたことにより、国際シンポジウムを開催することにつながっています。それらを通じて書籍出版することができました。（書籍出版，研究会・イベントの継続）

・自由度の高い支援が現在までの継続した活動に繋がっています。（研究会・イベントの継続）

・本事業でご支援頂いた企画では、全国から 100 人以上の研究者が参加してくださり、大盛況でした。その結果、我々の分野横断的な取り組みの重要性が全国的に広がりました。それによって第 1 回の企画者として多くの方に覚えていただいたことは、現在のキャリアや共同研究の形成に大きなプラスがあったと考えています。（ネットワークの拡大，研究会・イベントの継続，キャリアアップ）

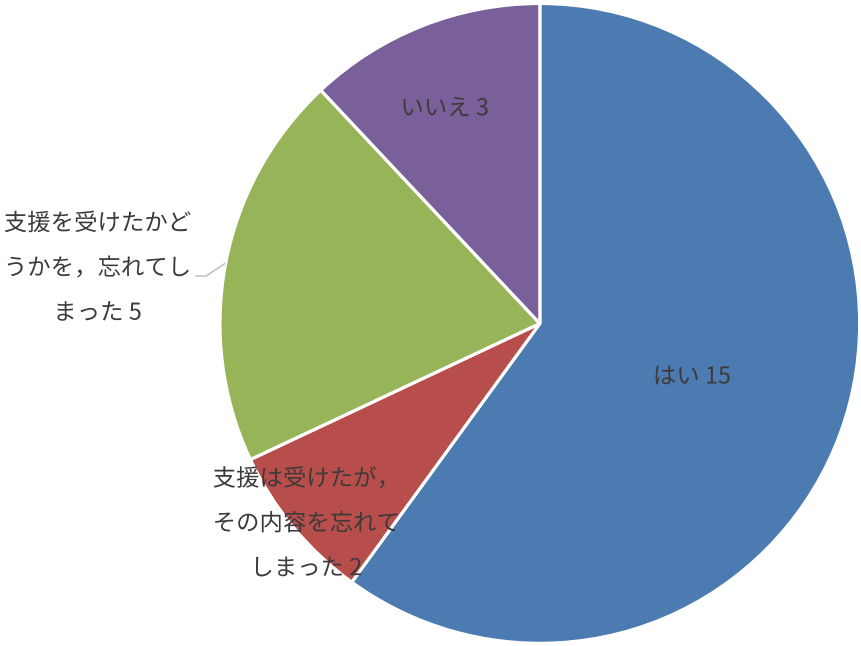
・経験のシェアを目的とした研究会という活動を通じて、新規事業開拓を企むディープな実業系利用者と研究者をつなぐブリッジング組織としてゆるくながくボランティアベースで毎年 2 回の 1 泊 2 日研究会と日常的な Facebook 上の交流が続いてきたことにより、とくに積極的にアクションをおこさなくても世界の最新の潮流と裏事情などがなにもしなくてもどんどん入ってくるため、時流の数歩先を効率よく歩みながら、インパクトの高い研究アクションが連続できている。学会系研究会としては徹底的に活動ハードルを最低限にしていること（ワークロードの最小化、丸投げ）がこれまでずっと継続､成長しつづけてきた原因のひとつだと考える｡会員数は当時の 50 人程度？からかなり増えて、6 年目の現在は 1600 人ほどと 3000%以上増加し、日常的に Facebook で情報交流に参加するアクティブユーザーは 800 人～900 人をほこる。（ネットワークの拡大，イベント・研究会の継続）

Q4：企画前と比較して，以下に示すスキルはそれぞれどの程度向上したと思うか

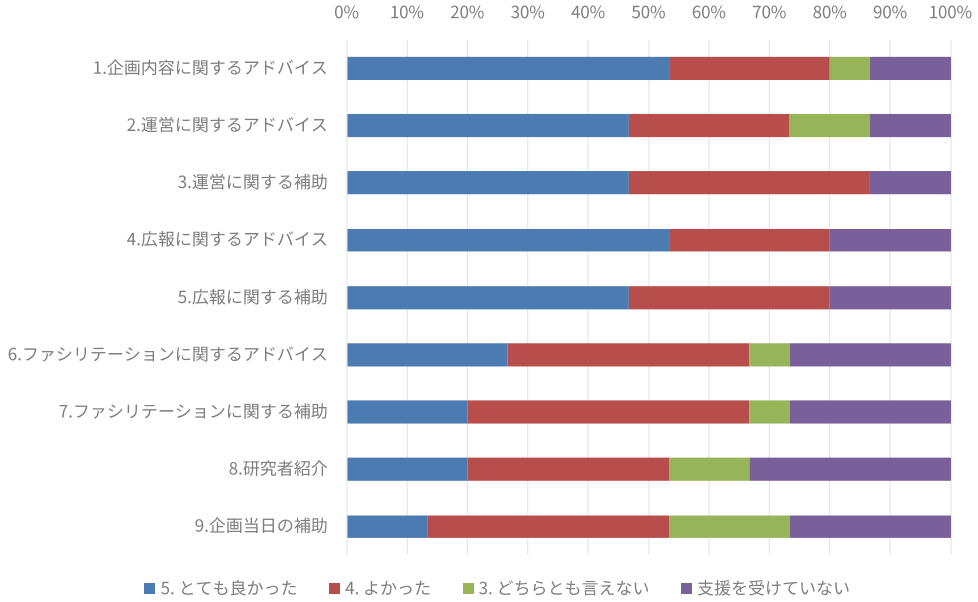


その他（上記以外に得られたスキル・能力：自由記述内容）
・和書・洋書による出版、その交渉力、企画推進力
・長い目でみてテキトーに楽しくやるための力の抜き方
・若手の業績

Q5-1：運営事務局からの支援有無



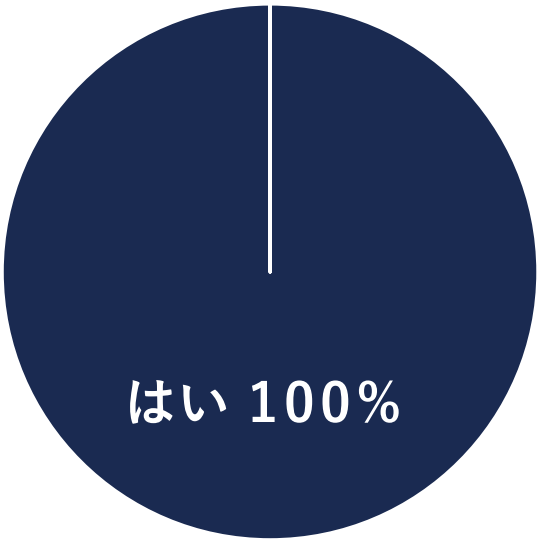
Q5-2：運営事務局からの支援評価（支援を受けた案件のみ；n=15）



良かった支援（自由記述）

- 申請から助成までが迅速でした。他の研究費よりも使用ルールに柔軟性があり、ありがたかったです。
- 運営事務局からの支援について、具体的な会合の設定、その場での質疑・応答、さらに、その後のフォローなど、すべての点に関して完璧なご対応をいただき、心より感謝しております。
- そもそも KURA より分野横断プラットフォーム構築事業への応募を勧めていただいたことにとても感謝しています。

Q6：今後も学際研究を始めるための企画を支援する学内の資金支援制度が必要か



自由記述内容（回答者が特定されないよう、一部抜粋）

・芽出しのテーマのブラッシュアップとして用いるには非常に重要な事業だと思います。

・ゆるーくいろいろ試してみる，つながるということのための支援はあまりないので，貴重だと思います。

・学際研究を始めるモチベーションになるだけでなく、資金獲得実績はその後の研究者のキャリアパスにおいて役立つと考えられるため。

・学際交流が、それぞれの学問分野での研究の推進や深化につながる実感があるので、そのような体験を多くの人にしてほしいと思いますし、自分もまた更なる発展を期して利用させていただければと思っています。

・やってみなければわからないし、やってみても外れもあるだろうけれど、そもそもやらないことにはなにも起きないから。思考よりもまずアクション、そしてその連続をすばやく繰り返すことがさっさと道をひらくことにつながるとおもいます（プロトタイピング思考）。研究はそういう世界ですが、ひとりの努力ではできない超領域横断型アイデアがどんどんでてくるこの時代には KAKEN などの旧来からの枠組みがそれらを取りこぼしつつあるとおもいます。キャッチアップにはこのような小規模フリースタイルの投げ銭型のエンパシーの表現がとても大切かとおもいます。

・何かやりたいことがあってもどう始めたらいいのか分からないという研究者は多いと感じています。その「何か」にどう向き合うかということから支援できるような制度が発展していくことを期待したいからです。

・既存分野の枠内で説明しにくい試みについては、資金面を抜きにしても、「支援を受けている」という事実自体が重要であり、自身の関心領域を社会的に存在させるための大きな後押しになります。いわば「お墨付き」ということです。私にとって今回の支援に最も意味があったのもその点であり、今後もぜひ存在してほしいと思います。

・分野横断的な企画は審査者の確保が難しく、科研でも民間の助成でも大分類の枠を超えるものはあまり想定されていません。こちらは京大ならではの助成だと思います。

・比較的容易な申請で、自由な発想に対して、人的にも経済的にも補助を受ける機会は貴重だと思う。

・科研費が必ずしも獲得できるとは限らず、また、年度内の運営費が減額される傾向にある中で、若手を交えた国際・学際シンポジウムを開催する意義は計り知れない。今回は、その助成を得ることができ、本当に有意義なシンポジウムを開催することができました。さらに、それが、次年度の京都大学国際シンポジウムへと飛躍するきっかけになりました。

・若手研究者にとって、自分が所属する学会の枠を超えた学際的集まりの企画は、研究者としての枠を広げるとても良い機会です。しかし、学会レベルまでなら多くの機会や支援があっても、それ以上の広いレベルでのイベントの企画は、

金銭的にも運営的にもなかなか難しいです。この事業のような取り組みで、旅費や消耗品費のご支援、企画に関するアドバイス・サポートを頂ければ、多くの研究者の学際的取り組みに対して大きなプラスの効果があると思います。

・主に以下３つを挙げます。他の外部資金による助成とは異なり、専門「分野」に縛られることなく（例：科研応募の際「分野」を選択する必要があるなど）、応募できること。２．上記１．と関連し、必ずしも研究者でなく、実践者やコミュニケーターも含めて、幅広い関係者と協力する企画を立てられること３．プロジェクト規模関係なく（小規模であっても）、日頃の気づきから生まれる大切にしたいテーマや切り口を基に生まれたアイデアをすぐ企画に結びつけやすいこと。

・他分野の人とのつながりは、なかなか各分野の中での活動からは生まれにくいです。サポートの仕組みがあると大変助かります。

・学際活動を推進するために必要だから。

・学際という条件がなければ、同分野で安住してしまう。

Q7：こんな学内ファンドがあったら良いと思うファンド（自由記述：回答者が特定されないよう、一部抜粋）

・コロナの影響がまだあるので、年度をまたがるもの。

・共同研究を募集している人に手を挙げてもらい、その人と研究をしたい人を全学で公募し、マッチングしたら、研究費補助をするファンド。

・異分野交流を積極的に志向する若手研究者の育成支援。

・毎回フリーフード目当ての参加学生をジャッジにして、話だけ聞いて、人気得票で資金争奪戦（もらえる資金は数千円でもよい）。報告書はあほらしいので不要とし、ただし記憶にのこるようにかっこいいタイトルのついた証書（京都大学の有志学生レビュアーによる競争型賞金を獲得しました、みたいな）を毎月時計台でする。大小さまざまな企業の開発系の責任者や銀行投資関係者にも青田刈りできます、少額で若手に動機づけできる 1 回限りの勝手賞みたいなものもできますみたいなインビテーションを送って巻き込む。

・部局単位でなく、個々の研究者レベルでの「ちょっとした」学際的試みを機動的に支援していただけるものがあるとよいと思います。

・研究技術を向上させるためのワークショップや講演会（対面およびウェビナー）をサポートするファンド（少額でもよいです）。

最後に（2013-2022 年度の総数）

応募数：のべ 125 件
採択数：98 件
参加者数（確認可能数）：1023 人（2013-2022）

京都大学 分野横断プラットフォーム構築事業

（研究大学強化促進事業「百家争鳴」プログラム）

成果報告書 NO.3　2023 年 3 月

発行　京都大学 学術研究展開センター
〒 606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL　075-753-5108
URL　https://www.kura.kyoto-u.ac.jp/

京都大学 学際融合教育研究推進センター
〒 606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL　075-753-5338
URL　http://www.cpier.kyoto-u.ac.jp/

本冊子のプロジェクトは下記サイトでも閲覧可能です。

K.U.RESEARCH「参加できる研究」

http://research.kyoto-u.ac.jp/gp